

みんなづくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

国立民族学博物館ハンズ・オン「ものの広場」を活用した学習プログラムの開発と実践Ⅱ（実践編）：
博学連携による「ミニ博物館」づくりから国際理解へ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木村, 慶太 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001644

国立民族学博物館ハンズ・オン「ものの広場」を 活用した学習プログラムの開発と実践Ⅱ（実践編）

—— 博学連携による「ミニ博物館」づくりから国際理解へ ——

木村 慶太

奈良県香芝市立香芝西中学校

はじめに

- 1 展示品の選択と展示方法について
- 2 展示品の収集
 - 2.1 生徒達が自らの手で製作する
 - 2.2 インターネットを通じて購入する
 - 2.3 生徒の家庭から持ち寄る
 - 2.4 民博からお借りする
- 3 ミニ博物館の開館時期
- 4 ミニ博物館に至るまでの取り組み

5 ミニ博物館開館！

- おわりに
指導案 文化祭でミニ博物館をつくろう
～触って、つくって、感じよう～
ミニ博物館 アンケート
毎日新聞記事
読売新聞記事
奈良新聞記事
奈良県教育振興会教育機関誌「やまと」記事

*キーワード：博学連携，国際理解，技術と美術の合科授業，マルチメディア，文化祭

はじめに

平成15年12月に学習指導要領の一部改正が為された。そこでは、「総合的な学習の時間」の一層の充実が求められることになった。さらに、総則には「博物館の活用」と初めて博物館という用語が学習指導要領に明記されたことも注目すべきことであった。

また、現行の指導要領では、「国際理解」についての学習も非常に重視されている。

そこで本校では、技術科と美術科が協力して、校内で国際理解につながるミニ博物館を作ってみるという取り組みを実践した。

両教科の観点から見れば、博物館学習においても、国際理解においても「自ら製作する」ということが何よりも有効であると捉えることができる。

たとえば、各国独自の民芸品や生活用具を製作し、自分たちで展示することにより、その国の現在の暮らしに思いをはせることができる。また、自分たちが製作した作品のルーツなどを調べることにより、その国の地理的風土や歴史的背景をも学ぶことが出来る。1つの民芸品を通してさまざまな軸から国際理解学習ができると考えることができるのである。

また、その製作は単に展示物のみを作るということではなく、「博物館そのもの」を作るということにも重点をおいた。「見せる側」に立ち学習することにより、自分が

「見る側」に立ったとき、さらに多角的な視点で学習することができ、より重層的な教育的効果があげられるのではないかと考えたからである。

1 展示品の選択と展示方法について

本実践における展示品については国際理解につながるような諸外国の民芸品や生活用品を中心としたものとした。また生徒たちが自文化と異文化を比較し、その共通性と差異性を見だしていく中で本当の国際理解が深まっていくであろうと考えられることから、日本国内の民芸品なども合わせて展示していくこととなった。

具体的な展示内容については、国立民族学博物館（大阪府吹田市。以下民博と記す）のご協力をいただき、民博において展示品と展示方法についての学習と検討を生徒達とともに行うことができた。

さまざまな展示品・展示方法を見学させていただいた結果「ものの広場」のコンセプトを参考にさせていただくことにした。「ものの広場」では、40種100余点のハンズ・オン展示を観覧者が自由に触れることができる。また、「Drみんぱく」というマルチメディア解説マシンがあり、観覧者は、自分が興味を持った展示資料について、マルチメディア解説を聞くことができる。

多くの博物館の展示品は、実際に触れることのできないハンズ・オフ展示が圧倒的に多い。しかし、「触れる」ことによって非常に多くのことを感じとることができるということは定説となっている。科学的観点からも触感の重要性は、充分認識されている。技術科の授業においても、生徒が作品を製作する際の材料の触感の好悪の大切さが現在報告されつつある。本実践では、そういった理由からも、ハンズ・オン展示を重要視し、「ものの広場」のコンセプトを参考にすることとしたのである。

民博にはミニ博物館開館までに合計3回訪れた。民博への見学を重ねていくなかで、ものの広場の「火吹き竹」や「寿司の木型」などは、大人では当たり前知っているが、中学生にとっては異文化的なものであるということが分かったりし、教師の側にも指導の上で参考になることが多くあった。

また、展示品及び展示方法を生徒達とともに検討できたことは、生徒達の「意欲・関心」を触発する非常によい機会ともなった。

2 展示品の収集

展示品については、以下の4つの方法で収集した。

2.1 生徒達が自らの手で製作する

展示品の中で、自分たちで作れるものは自分たちで作ることが、今回の博物館展示の基本である。単に展示品だけではなく、展示場や展示空間においてもそれは同じである。あくまで、「まず、手作りから」の姿勢にこだわった。

生徒達が製作した展示資料は「寿司の木型」「バァ(ブータンの国技である弓矢の的)」「火吹き竹」「ブーメラン」の4種・30余点である。



写真1 「バァ」を製作する生徒

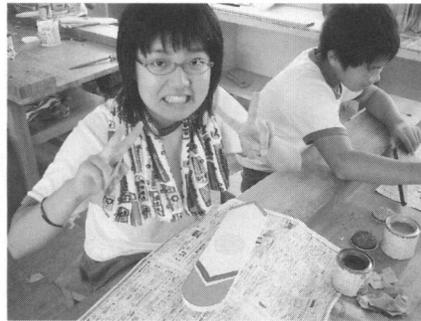


写真2 塗装を終えて

2.2 インターネットを通じて購入する

Web上には、様々な諸外国の雑貨店が存在する。その中で今回のコンセプトに合うものを生徒達が自ら選んで発注した。Web上での買い物を初めて経験するという生徒がほとんどであり、生徒達にとっては雑貨店からの「確かに注文をお受けしました」という確認メールを受け取るだけでも新鮮でうれしいことのようにであった。

展示する前に自分たちで、購入したものを試したりすることも楽しそうであった。日本では、「香」といえば「線香」を発想するものなので、インドの「ヒモ香」というその形だけでも意外性を感じていた。試したときの香りなども楽しんでいた。インターネットを通じて購入したものは、「ムエタイ(タイ式ボクシング)のトランクス」「シリアの砂絵」「フランスのクルミ割り」「信楽焼のごま炒り器」など、20余点である。



写真3 ムエタイのトランクスの試着



写真4 インドのヒモ香を試す

2.3 生徒の家庭から持ち寄る

生徒達から「わざわざ購入しなくても、みんなの家にも展示品となるものがあるのではないか？」との声が上がった。考えてもみなかったことであるが、生徒から声上がり、全ての生徒が賛同したこともあり、一度各自が家庭から持ち寄ってみることにした。

持ち寄ってみると、展示品として充分活用できるものが多々あり「家庭から持ち寄る」という方法が意外にも非常に有効であることがわかった。

生徒達の熱意を見て、本校の教師達も協力を申し出てくれ、家にある展示品となりそうなものを持参してくれた。生徒及び教師が持参し展示したものは、「ギリシャの刀剣」「韓国の民族衣装」「中国の本」「マサイ族の武器」など、30点以上にのぼった。

なお持ち寄る場合の基準は、生徒達が実践に取り組む前に、「ものの広場」の調査および評価を行った結果から設定した。生徒達の評価より、「ものの広場」の展示資料は、意外性と触感性（木製などの自然素材が好まれる）の2つの視点が重視されていることが明らかになったからである。

2.4 民博からお借りする

以上に加えて民博の「もののひろば」で実際に展示している展示品を10余点、マルチメディア解説の「Drみんぱく」とともにお借りすることができた。「Drみんぱく」は生徒達が、みんぱくに訪れた中で最も興味を示したものである。

「Drみんぱく」を真似、自分たちの展示品についてのマルチメディア解説マシン「ふたかみ君」をつくらうとしたほどである。「Drみんぱく」を借りることができると知ったときの生徒の喜びは非常に大きいものであった。

以上の方法で、製作したミニ博物館には100点以上の展示資料を用意できた。これは、教師・生徒ともに最初に予定していた2倍の数にあたる。中学校のミニ博物館としては、充分すぎる展示資料数となった。

なお、ミニ博物館の命名についても話し合った。「はくぶつかんかしば」「どんづる博物館」「ふたかみ博物館」などの案も出たが、最終的にリーダーシップをとっていた生徒から「僕たちが手作りで作った博物館だから『手作り博物館』でよいのではないか」との提言があり、一決した。



写真5 マルチメディア解説マシン「Drみんぱく」
(外枠は生徒が作成)

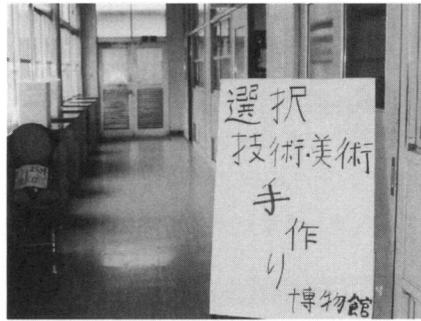


写真6 手作り博物館の看板

3 ミニ博物館の開館時期 ～本校文化祭について～

本校は、奈良県の西北、ふたかみ山のふもとと屯鶴峯の中に位置する自然豊かな環境にある。生徒たちは緑の中、のびのびと元気に学業にスポーツに励んでいる。

そういった生徒たちが主体となって行う多くの学校行事の中でもっとも特色あるものは何と言っても文化祭である。

生徒会が主体となり、学級・部活動・教科・生徒の個人有志・PTA・地域の方・教師のそれぞれが、舞台発表・展示発表・模擬店販売などに全力を尽くす。体育大会後の限られた時間ではあるが、生徒たちは精一杯準備し、非常に充実した内容のものとなっている。プラスバンド部やバトン部は文化祭が三年生最後の発表の場であるために、全学年がどんときよりも協力し最高の演奏・演技を行う。その後、下級生と別れを惜しみながら涙を流している姿には、毎年感動を禁じえない。その他の生徒たちにとっても、一年に一度の一番楽しみな、大切な日となっている。

また、本校において文化祭は保護者の方にも来校いただく大きな機会の一つである。通常の授業参観とは違い、様々な形で生徒の日頃の学習の成果を丸一日かけて見ていただくことができるので、例年多くの保護者にご参加いただいている。

生徒会が工夫を凝らし演出するオープニングやフィナーレは、プロのイベンターが企画するものにけっして劣らないほどのものである。

ミニ博物館の開館もこの文化祭において、他にはないと考え、4月から10月19日に的を絞って準備を進めた。

4 ミニ博物館開館に至るまでの取り組み

学校内においてミニ博物館の使用に許可された教室は、何年も使用していない倉庫とされていた部屋であった。しかしそれは、校内の運営上やむを得ないことでもあった。

壁は、すす汚れ掲示板は破れていた。

生徒達は、展示品を並べるところから始めるつもりであったが、「この部屋ではあまりにも来館者に対して失礼である。」「自分たちが逆の立場であっても決していい気持ちはしないであろう。」「教室の汚さでうんざりし、展示品をあまり見てくれないのではないか。」との声が出てきた。

生徒達の博物館づくりは、壁のペンキ塗りから始まることとなった。

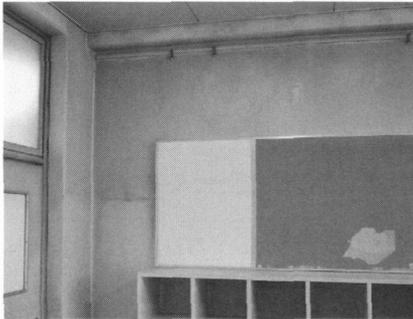


写真7 与えられた部屋の状態

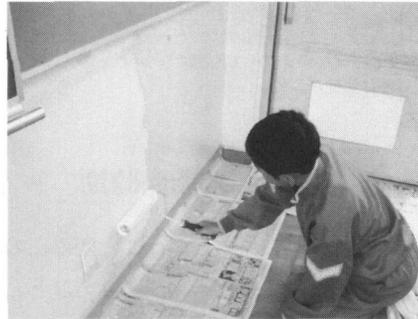


写真8 壁のペンキ塗りをする

壁塗りだけで、展示場づくりが終わるわけではない。掲示板の修復・展示用机の高さの調節と配置の検討などをおこなった。まさに一から「博物館をつくる」作業であった。生徒達はこの作業の中ではじめて「より気持ちよく、よりわかりやすく観覧してもらうために」ということを考え、「見せる側の苦勞」を痛感したと言える。それは、非常によい体験学習となったし、後述する「手作り博物館成功」の喜びをより大きいものとする事になった。



写真9 壁掛け展示を行う



写真10 展示台や展示物の配置を検討する



写真11 解説ラベルの作成



写真12 完成したミニ博物館

5 ミニ博物館開館！

10月19日文化祭当日、予定通りミニ博物館を開館した。全校生徒及び文化祭に訪れたほとんどすべての保護者が来館し熱心に観覧してくれた。来館者は、まるで本物の博物館を見るように、展示資料一つ一つを手に取り、解説ラベルを読み、マルチメディア解説に見入っていた。

生徒たちも当番を決め解説者となり、展示資料やマルチメディア解説マシンの使用方法などを来館者に一所懸命説明した。

その時の生徒達は、いかにも誇らしげであった。

生徒達が、今回の博物館について誇らしく感じる事ができた理由は、以下の3点であると考えられる。

- ① 博物館そのものが全て手作りであること
- ② 展示資料が全て本物でありレプリカではないこと
- ③ ハンズ・オンという展示方法を取り、来館者がそれに満足していること

(③については、来館者に対して来館後に実施したアンケートにおいても明らかで



写真13 開館している様子



写真14 来館者に展示資料の解説をする生徒

あった。実施したアンケートについては、後頁に資料として添付する)

また、毎日・読売・奈良の各新聞社が取材に訪れ、翌日の朝刊等に掲載された。さらに奈良県において最も権威ある教育機関誌「やまと」にも掲載され、本実践の紹介の場を与えていただくことができた。その新聞記事及び「やまと」についても、後頁に資料として添付する。

おわりに

生徒たちは、文化祭前の約2週間は休日も返上し、ひたすらミニ博物館準備に努力した。展示台の調節や、採光のバランス検討、解説ラベルの制作、さらには自分たちで作るマルチメディア解説マシン「ふたかみ君」のビデオ撮影など、しなければならないことが数え切れないほどあったためである。しかしそれも多くの来館者数と好評の声によって報われ、生徒たちはとてもうれしそうであった。

今回の実践では、「国際理解」「博物館学習」というふたつの大きなテーマに加えて、技術科の「匠」について、あるいは美術科の「美」の観点などを盛り込み重層的な教育目標が達成できたと考えている。また博物館との連携の有効性を立証できたことも大きな成果だと考えている。しかしそれ以上に「努力したことは報われる」ということを本当の自分の体験から学べたことは、何にもまして大きな成果であったことが、生徒たちの表情から気づかされた。

「博物館」というものを通して学習できることは無限にある。本校においても今後は「展示したものを実際に活用した体験学習」「マルチメディア解説のさらなる充実」「各国の生活用品・民芸品の比較検討」など、今回の実践をさらに発展させていく予定である。さらには、博物館を活用した総合的な学習プログラムの開発に繋げていきたいと考えている。

最後に、今回の実践の概要を国際理解教育学会が、提示した実践枠の形式で次頁より示す。

1. 単元名 文化祭でミニ博物館をつくろう ～触って、つくって、感じよう～					
カリキュラム開発の 視点		1	2	3	4
	A 多文化理解	文化理解	文化交流	多文化 共生	
	B グローバル社会	世界との つながり	情報化		
	C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
	D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	

2. 対象 中学校1・2年 奈良県香芝市立西中学校 中学1年生17名, 2年生17名 授業者 木村慶太(技術・家庭科), 山口ふみや(美術科)	
3. 教科領域 中学校 選択教科 技術・家庭科および美術科	
4. 実施時期 2004年4月~11月	5. 総時数 全35時間
6. 単元(活動)目標 ・国際理解教育をテーマとしたミニ博物館をつくることを通して, 各国の日常生活品とその背景となる生活と文化について理解する。【知識目標】 ・展示資料をつくることを通して, ものづくりについての知識と技能を身に付ける。 ・展示物に関するマルチメディア解説を作成することにより, 情報機器の有効活用と, スキル習得について学習する。 【知識目標】【技能目標】 ・見る人の立場にたって博物館展示を工夫する。【体験目標】 ・協力して博物館をつくらうとし, 自文化, 異文化についての理解を深め, 生活の視点から人間としての共通性と差異性を考えようとしている。 ・博物館独自の学びである, 「展示品から感じる」ことをめざそうとしている。 【態度目標】	
7. キーワード ものづくり マルチメディア 文化理解 博物館 ハンズ・オン 生活	
8. 単元について(教材観・単元設定の理由・提案することなど) 学習指導要領が一部改正され, 「総合的な学習の時間」の一層の充実と, 博物館などの社会教育施設等との連携が求められている。本実践は, 国立民族学博物館におけるハンズ・オン教材のコーナーである「ものの広場」の展示資料を活用した国際理解教育の学習プログラムの試行である。「ものの広場」には, 民族学の博物館らしい40種100点の日用品が展示されている。これらの展示資料は, 自由に触ったり, 操作することができ, 所定の機器によりマルチメディア解説も視聴できる。「ものの広場」の資料を活用して, 文化祭でミニ博物館をつくることを最終目的として, 技術・家庭科としての「ものづくり」に重点を置くことにする。ここでいう活用とは, 「ものの広場」を見本とし, 一部は展示資料を借り受け, 一部は生徒たちがつくるという意味である。また博物館の先生方からもアドバイスと協力を得られるという状況にある。 博物館を活用した新しい学習プログラムとして提案することは以下の点である。 ・展示資料を国立民族学博物館「ものの広場」にあるものにしほりこむことによって, 生徒が調べた成果などを他校とWebページなどで共有できる。 ・博物館におけるハンズ・オン教材には, 材料やものづくりという技術・家庭科のものづくりに必要な知識と技能, 工夫・創造の観点が多く含まれている。 ・「ものの広場」の展示資料は, 外国のものばかりでなく, 日本の伝統的な民具や遊具なども含まれており, 国際理解教育でめざす学習領域(多文化社会)が適切	

<p>に学べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 文化祭でミニ博物館をつくるという発想は、今後他教科との連携や総合的な学習の時間での取り組みにも発展可能である。ひとつの展示資料を深く追究しその国の文化を調べる、実際につくってみて感じたものを発表するなどさまざまな追究活動の方法が考えられる。 		
<p>9. 連携について</p> <ul style="list-style-type: none"> 技術・家庭科と美術科が連携した合科による選択授業である 国立民族学博物館の職員の方との連携による調査とつくった作品の展示 実践校同士の情報の共有（Webページによる） 大学および大阪府教育センターとの連携（教材開発および単元開発の協力） 		
<p>10. 展開計画・記録</p>		
次・時	主な学習活動と子ども（学習者）の意識	○留意点
4	<p>1. 国立民族学博物館「ものの広場」の調査（発見）</p> <ul style="list-style-type: none"> 展示資料についての調査 調べたことをまとめる（Webページ形式で） 	<p>○マルチメディア解説や専門家の解説などをもとに、全展示資料についてまとめる。</p> <p>○原則的には各自が作りたいものをつくるが、全体としてのバランスに注意。設計の段階では大学、教育センターなどが協力する。</p>
25	<p>2. 展示資料をつくる（体験・理解）</p> <ul style="list-style-type: none"> 借りる展示資料，自分たちでつくる展示資料を検討する（国際理解教育の視点に留意）。 製作品の設計を行う。 展示資料の製作（例：すしの木型，レイアウト） 作れないが適切な展示資料を購入し，マルチメディア解説を製作。 	<p>○「ものの広場」にない展示資料も購入し調べる</p> <p>○文化祭で選択授業として1つの教室を展示室とする。</p>
5	<p>3. 博物館をつくる（工夫・達成）</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒がつくった展示資料を中心に，民博からも一部展示資料を貸与。民博のマルチメディア解説も設置の可能性あり。 文化祭で1教室をミニ博物館として展示する。 	<p>○解説ラベルおよびマルチメディア解説は簡潔に，展示は立体的にする。</p> <p>○生徒品を民博で展示してもらえる可能性あり。</p>
1	<p>4. 学習のまとめ（振り返り）</p>	
<p>11. 評価計画</p> <ul style="list-style-type: none"> 対象としている展示資料を日用品として，使われている生活場面を理解することができたか。【知識目標】（自己評価：随時） 展示資料を使われる目的に応じて工夫し，作ることができた。【技能目標】（自己評価：製作終了後，他者評価：文化祭開催時） 		

- ・ミニ博物館の展示を見る人の立場にたって、完成させることができた。
【体験目標】(自己評価および他者評価：文化祭終了時)
- ・展示資料をただ調べるのではなく、展示資料から生活を感じようとする博物館独自の学びをめざそうとしている。【態度目標】(自己評価：随時)
- ・異なる文化に対して寛容的な姿勢を身に付けようとしていた。
【態度目標】(自己評価：随時)

12. 苦勞した点

展示資料を感じるという博物館独自の学びを確立するまではいかなかった。今回は材料評価の方法で触感性において感じるという視点でアプローチした。今後、教育の新しい流れとしての「感じる」教育の確立に向けてさらに検討中である。

13. 改善するとしたら

さらに多くの教科が連携できて、最終的には総合的な学習の時間で取り組むようにしたい。そのためには文化祭におけるミニ博物館の実践が、生徒の達成感につながるための教員側の仕掛けと工夫が求められている。生活環境から社会環境、自然環境へとつながる適切なキーワードをさらに改善していく。

14. 資料

実践に先立ち、2004年2月から4月にかけて、3校32名の中学生による「ものの広場」の調査を行った。全展示資料を、意外性、触感性、操作性、文化理解、マルチメディア解説、総合評価の6つの観点で評価した。総合評価は、触感性と高い相関関係にあった。

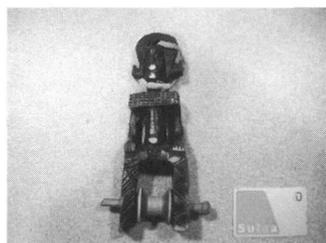
そのベスト5を以下に示す。ハンズ・オン教材であるので触り心地のよいものが適していることがわかった。



1位 すしの木型 【日本】木製



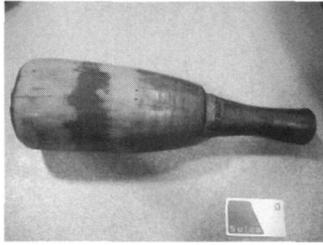
2位 モッキログ(木製の雁) 【韓国】木製



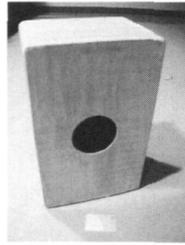
3位 滑車【マリ】木製



4位 火吹き竹【日本】竹製



5位 しわ伸ばし機【マリ】木製



6位 カホン（楽器）【ペルー】木製

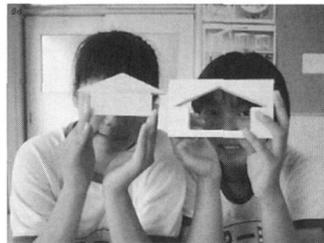
これらの結果をもとに、製作する展示資料は、すしの木型、レインツリー、火吹き竹などに決定した。

15. 生徒の作品

民博「ものの広場」にある展示資料を参考に、自分達で文化祭に展示する資料を製作した。



調査



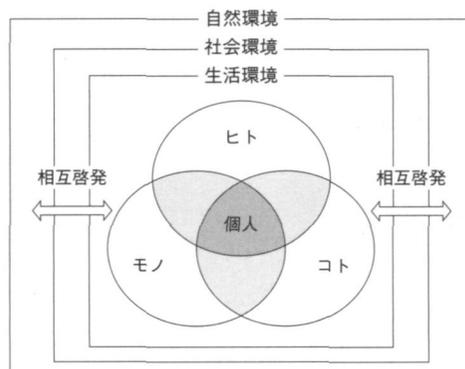
ものづくり

つくれるものはつくり、家にあり展示資料として適するものは家から持ってくることにした。これらは生徒から提案があったことである。ミニ博物館の展示資料として適切かどうかの判断は、「ものの広場」の展示資料評価の分析結果より、「意外性」と「触感性」に優れたものという2点を基準として。結果的には、生徒がもってきたものはすべて展示したが、調査の結果は適切な判断基準となった。

16. 備考（授業者による自由記述）

○学習者へ降ろすキーワード

「人・モノ・コトとの相互啓発」



ミニ博物館 アンケート

今後の香芝西中学校の国際理解教育と技術科教育のよりよい発展のため、以下の簡単なアンケートにご協力よろしくお願い致します。アンケートの回答は、質問1から質問4には、番号(数字)に○印をうっていただき、質問4には、ことばでお答えください。では、よろしくお願い致します。

質問1 回答者であるあなたについて教えてください。

生徒の場合	学年	1	2	3
保護者または教師が保護者以外の場合	1	保護者	2	教師または保護者以外

質問2 総合評価 全体として本博物館はいかがでしたか

とてもよかった	よかった	どちらでもない	よくない	もっと検討すべきだ
5	4	3	2	1

質問3 本博物館は、触感(手^て触^ざり^{わり}かん^{かん}感)を大切にしたいため、展示物のすべてを自由に触っていただいてよいということにしました。その点について、どう思われますか?

とてもよいと思う	よいと思う	どちらでもよいと思う
5	4	3
あまり意義は感じない		まったく意義は感じない
2		1

質問4 本博物館は、技術科を中心とした国際理解に対する取り組みのため、展示物のいくつかを生徒たちが自身で制作しました。その点についてどう感じますか?

とてもよいと思う	よいと思う	どちらでもよいと思う
5	4	3
あまり意義は感じない		まったく意義は感じない
2		1

質問5 本博物館でよかったと思えることや、改善(こういうふうにしたらもっとよくなる)すべきだと思うことがありましたら、ぜひお書きください。(必ず、何かを書いてください。生徒・教師ともに今後の参考に使いたいと思っております。よろしくお願い致します。)

MAINICHI

新毎日

発行所: 大阪市北区梅田3丁目4番5号 〒530-8251 電話(06)6345-1551
 郵便振替口座 00920-0-450
 毎日新聞大阪本社 ©毎日新聞社 2004

「ミニ博物館」を作った生徒たち
 香芝市立香芝西中学校で



文化祭で「ミニ博物館」を披露
 香芝西中の
 1、2年生

香芝市立香芝西中学校(石田博章校長、27人)で19日、文化祭があり、技術と美術を選択教科として学んでいる1、2年生約25人が、「ミニ博物館」を披露した。

国立民族学博物館(大

阪吹田市)所有のイギリスの靴履き器などの民族品や生徒が製作したもので、世界4カ国の民族品約100点を教室に展示。触れることも出来るため、保護者や生徒らに好評だった。

生徒らは今年の4月から計画し、同博物館へ見学学習するなど、博物館や文教大学の今田晃一専任講師らの協力を得ながら完成させたユニークなもの。昨年12月の学習指導要領の一部改正で、博物館などの社会施設との連携を図った学習として全国初の試みで注目されているという。

生徒らは技術科の木村慶太教諭(42)や美術科の山口ふみや教諭(48)の指導のもと、ブータンの弓矢の的や日本のすしの木型、火吹き竹など30点を作ったほか、インターネットでタイの舞臺やフランスの蜂蜜スティックなどを購入。さらに、韓国のチマチヨリや各家庭にあるものを展示し、手作りの解説文も仕上げた。

「一生懸命取り組んできた井村正徳君(13)や井上嘉駿君(13)、吉武永真君(13)は「ミニ博物館を作ること、日本だけでなくほかの国のことが少しでも学べてよかった」と話した。また、今田専任講師は「国際理解教育の新しい学習スタイルとして注目される実践教育だ」と強調していた。

【山本和良】

読賣新聞

発行所
読売新聞大阪本社
第18599号

〒530-8551
大阪市北区野崎町5-9
電話 (06)6361-1111(代)
<http://www.yomiuri.co.jp/>

2004年(平成16年)10月26日 火曜日

2004年(平成16年)10月26日(火曜日) 言賣 書 余斤 屋村

民博資料や土産物でミニ博物館

香芝西中 文化祭で教室が“変身”

香芝市立香芝西中の文化祭から準備。木村教諭の知人の「など、各家庭にあった世界祭で一二年生二十五人が今田晃一・文教大講師(埼玉)の土産物なども持ち寄り、世界各地の民謡約百点を展(玉)玉(玉)が仲介し、学校との押しずしの木型やオースト示するミニ博物館を開設。連携を進める同博物館が協ラリアのブーメランなどはした。国立民族学博物館大(力)ネパールの仏具「マニ生徒が手作りした。阪府吹田市から資料を借(車)車(車)ベルーの木製楽器ゲ展示した教室では、生徒りたりインターネットで「イロ」など十一品の醸造品が調べて書いた解説も張り購入したりして展示品を取(を)を(を)借りることもできた。出した。一年生の井村正郁集。生徒たちは熱心に同級(の)のハチミツステイックなど君13は来た人が「へー」と驚いてくれて、頑張った生や父母らを案内した。をインターネットで購入。かいがあった」と笑顔で話同中で技術を担当する木(を)をインターネットで購入。かいがあった」と笑顔で話村慶太教諭と生徒が四月か「アフリカのマサイ族の武器」した。



奈良県教育振興会教育機関誌「やまと」



